
ファインドAウェイ：少壯

一期 つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファインドアウトイ・少社

【Zコード】

Z5698Y

【作者名】

一期つかわ

【あらすじ】

満点の星空に映した幼い頃の一人と、胸の中で咲く思い出の花。はみ出した影は緩やかなスロープを走り抜けて真っ白の闇の中へ。はぐれてしまった手は、戻ってはいけない記憶の扉を叩き、投げ出した気持ちは、世界を終わりへと導く。

「小学生最後の夏休み、みんなで思い出を作ろう!」その言葉から始まつた六人の夏。眠たい目を擦りながら忍びこんだ真夜中の校舎。屋上で見上げた星空は、六人の絆をより確かなものにした。そんな中、ある事件が起つる。

(「オアシスがかかるほどの強さたまご！」 同様、かなりソフトな文章でやっています)

第1話 香織の提案

昼休み、稔、和也、龍一、香織、アスカ、理彩の六人は、プールと体育館に挟まれた石置のスペースに集まっていた。

教室では何か物足りない、と外に出たはいいが、校庭で遊ぶ生徒の喧騒を避けるようにその場所に行き着いた。

稔は百葉箱の中が気になり、鎧板に顔を押し付けて隙間に手を突っ込んだ。

「この中ってさ、何が入ってると思う?」

誰へ訊ねるわけでもなく稔は独り言のように言った。

「UFO迎撃レーザー砲、とか?」

考える間もなく、木陰で覗いでいた香織が答えた。

才覚を履き違えたように間の抜けて、飄々とした口振りは、後頭部で手を組んで視線を宙に浮かべながら小さく体を揺らす姿と相俟つて、意識の無さをにじませた。

「聞いたか?」

稔は体を捻り、体育館の壁に寄りかかっていた和也と目を合わせた。
「UFO迎撃レーザー砲、だってさ。火星の裏に潜む緑色の宇宙人

が、何十機ものロボットとともに地球に攻め込んでくるんだ。たつたの一機で太刀打ちできると思うか？」

「その通り」和也は呆れたように頷いた。

突然、びゅうっと吹き付けた風に煽られた赤い髪をおさえながら香織は無表情で稔を見た。

「なんだなんだ！」

稔はわざとらしく立ち上がって身を引いた。

その様子を見ながら龍一が香織には聞こえないように和也に耳打ちした。

「今日の香織、やけにクールじゃね？ これじゃアスカと理彩のコントラストがまるで無意味だ」

「まあ、アイツ、たまにあんな感じになるよな」

「たまにじゃないって。そうだ……何か、悪いことを考えてる時とか、っていうかそういう時限定だ。うん。俺の言ってる通りだ。和也よ。今日は、いや、明日は何の日だ？」

「明日？ 明日は別に特別な休日とかじやなくて、ただの土曜日だろ？」「

「和也は、ホントに……和也だな」

「それ、どういふ意味？」

「わかるだろ？ 明日は」

香織は、うまい具合に頭にのつた木の葉を摘み取り、手のひらにのせ、ふつゝと息を吹き掛けた。

木の葉は当然のように吹き飛ばされ、ひらひらと翻りながら石畳に舞い落ちた。

それを見終わるや否や、香織は霸氣のある通る声で「ねえみんな！」と叫び、両隣にいたアスカと理彩、そして、稔、和也、龍一を見回した。

「え？ なに？」

理彩がみんなの言葉を代弁した。

それを皮切りに五人が香織に注目した。

すると香織は立ち上がり、もつ一度見回した。

「明日から夏休みじゃん？」

好奇心が滲み出た落ち着かない香織の様子は五人の不安を誘つた。

「そんなの、六年前から知ってるよ」

稔の皮肉めいた言葉も気にせず、

「だからさー、今日の夜中はさ、学校に忍び込もうよー。」

微笑みを通り越した莞爾たる笑みを浮かべた。

第2話 冷感と熱気

「えー楽しそーー。」

理彩は嬉しそうに微笑んだ。

「どうでしょー!?」

香織は理彩と目を合わせてから、稔、和也、龍一の方へ向き直った。

「つりちゃんが言つてるんだから間違いないっしょー。」

「どうだか」

和也は視線を斜め上に浮かせ、肩をすくめた。

「理彩の幼馴染みの和也が言つんだから間違いない、な」

同調するように稔が和也のもとまで歩みより、肩を組んだ。

「親友の稔が言つんだから間違いない」

和也は勝ち誇ったような顔で香織を見た。

「なんだよー！ あんたらって、そういうの好きやつじゃん

香織が不満そうに膨れつ面になり、集合する男子三人に渴を入れるようにドンと指差した。

「確かに、それに俺たち三人はなにも反対してるわけじゃない。ほら、一人すぐれない顔をしてるのが一人いるだろ?」

稔は香織の隣でひつそりと足を抱えて座る、アスカを指差した。

指をさされてアスカは、不意打ちをされたようにハッと顔をあげた。

「あーちゃんも行くよね?」

香織がアスカの肩を掴むと、アスカは戸惑ったように「え、私は……」と口ごもつた。太くて赤い縁の眼鏡の奥の瞳は潤んで、小刻みに震えていた。

「香織はアスカをいじめるのが好きみたいだけど、俺らはそれ見ていい気分がしない」

アスカを見るに見かねた和也が庇うように口をはさんだ。

「アスカが夜の九時には寝てるってことはあたしだって知ってるって。それがあたしの言う『深夜』とより何時間も前だつてこともね」

香織は、アスカの肩をぽんと叩くと。「今日ぐらい。パートと夜更かししたって、良いじゃん? ね?」と続けた。

「え、でも……」

香織と目を合わせながらもアスカの戸惑いはより増して、今にも泣きそうな表情を見せた。

「別に、深夜に学校忍び込む、じゃなくてもいいんじゃないの？他にも、もっと簡単にできるようなこと、あるじゃん」

と和也は引き下がることなく引き続きアスカを庇つた。

「例えば？」と香織。

「……虫取、とか？」

「それだけ？」

一人のやつとりを見かねた稔が呆れたよつて口をはさんだ。

「和也は頭が悪いからな。海とか、キャンプとか色々あるだろ？」

「それ毎年やつてる」

香織はシッしと振り払う仕草をした。「でも、校舎に忍び込むことは、毎年やつてない」

「わ、私！」

アスカが吹つ切れたように大きな声を発した。

アスカの大声は珍しく、五人の視線を一瞬で独り占めにした。

「……い、行くよ。今日は、夜中まで、起き、てる」

すると香織は満面の笑みを浮かべて、アスカの手を握つた。

「ちゅがあーちゃん！ ちゅうなへつわやー。」

「深夜深夜つーけど、そろそろ何時か教えてくれよ」

稔がそう言つと、香織は「深夜ついたら〇時に決まつてゐるじやんー。」と即答した。

アスカのひきつった笑顔は、さらにひきつった。

第3話 アスカのパンツ

和也は部屋のドアをそっと開け、左右を確認すると、真っ暗な廊下に出て、音をたてずにドアを閉めた。

注意深く忍び足で階段をおり、玄関で靴を履き、家のドアをそっと開けて、

外に飛び出した。

門を出て路地に出ると、

「カズちゃん……！」

理彩が小声で叫んで和也のもとまで走り寄った。

夜十時。

辺りは真っ暗で閑散としていて、街路灯の灯りだけが一人を照らした。

「見つからなかつたか？」

和也が汗を拭いながら、言つた。

「カズちゃんつてやつぱりバカだよ」

理彩はクスッと笑つた。灯りに照らされた大きな瞳は星空にもみらいいくらいきらきら光つた。

「香織とか稔に『バカ』って言われるのは慣れてなんとも思わないけど、お前に言われると、なんか腹立つな」

「私、言葉にはしてないけど、ずっと思つてたもん。カズちゃんは、バカ。でも……」

「でも?」

「す、ぐ、楽しそう。面白くて」

理彩は二ヶコリと笑みを浮かべて、顔を傾けた。

すると、和也は照れた様子で顔を赤らめて

「ホント、バカみたいだ……」

理彩に背を向けた。

「早くアスカを迎えに行こ」

と、道を歩き出した。

理彩は「私だつて恥ずかしいよ」と笑いながら、

和也と肩を並べた。

洒落た外観の白い一軒家の前に付くと和也は一階の電気のついた窓を見上げ、

「アスカのやつ、起きてるかな？」

と呟いた。

「電気ついてるじゃん。起きてるよ」

「あいつのことだから、耐えられなくなつてつけたまま寝ちゃつたかもよ？」

「大丈夫だよ」

理彩は、スカートのポケットから携帯を取り出し、

アスカへと電話した。

ワンホールで、

「もしもし、理彩ちゃん……？」

と、眠たそうで弱々しいアスカの声が受話口から聞こえた。

「よかつた。ちゃんと起きててくれて」

理彩はホッと肩を撫で下ろした。

「眠いよう……」

「今迎えに来たよ。家の前」

「……ホント？」

二階の部屋のカーテンが開き、アスカが理彩と和也の姿を確認する。赤くて太枠の眼鏡の奥の瞳は微かに揺れていた。

理彩も、アスカの姿を確認すると、大きく手を振った。

「まだ、お母さん起きてるよお……」

窓を開けて、小さく手を振りながら、アスカが言つ。

「大丈夫だよ。窓から抜ければ」

理彩はアスカに向かつて親指を立ててウインクした。

「で、でも……」

「大丈夫、私たちがサポートするから、ね！」

アスカの部屋の下まで行くと、

「ほら、そこ！　そこに足掛けで！」

と、理彩は家の壁の突起したところを指差した。

「え、でも……怖いよう」

アスカは足を乗り出しながらもためらつ。

「大丈夫。私と、カズちゃんがいるから」

それでもアスカは戸惑っていた。

すると、理彩はあることに気がついた。

アスカはワンピースを着ていた。

「大丈夫だよ、あーちゃん。カズちゃんはそんなスケベじゃないし」

「う、うん……」

アスカはなんとなく納得して、サンダルを履いた足を下に伸ばした。

両足を出っ張りにかけると、壁に体を向けて張り付いた。

「理彩ちゃん……」

アスカは心配そうに呟く。

「飛んであーちゃん！ 地面はすぐ近くだよー！」

理彩と和也は下でアスカを支える準備をした。

「パンツ……普通に白いな……」

和也が何気なく呟くと、「きやつー」と力抜けたようにアスカは手を離し、一人に飛び込んだ。

第3話 アスカのパンツ（後書き）

次は、香織&龍一&稔サイドです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5698y/>

ファインドAウェイ：少壮

2011年11月21日10時53分発行